

右京区基本計画策定委員会
第3回 豊かな自然と歴史文化のまちづくり部会 摘録

日 時： 平成21年9月14日（月）
午後6時30分～午後8時30分
場 所： 右京区役所5階大会議室2
出席者： 神吉部会長 ・ 岩澤委員
奥田委員 ・ 久保委員
坂口委員 ・ 森委員
新妻委員

右京の歴史や文化を活かす

- 最近では観光だけでなく、歴史を詳細に調べる歴史好きが増えている。
- 右京には、多様な歴史文化の蓄積があるので、地域の歴史を紹介すると、新たなタイプの観光の発展につながるのではないかと。
- 観光客が数日滞在して右京を楽しめるような観光資源を見つけていく必要がある。それには、地元の人に話を聞いたりして、地元の人自身が知っていく必要がある。地元の人が右京のことを知る機会・場はないのだろうか。
- 実際にそういう機会をつくっている方もいて、皆さん関心が高く盛況だ。
- 住民が地域の歴史文化に興味を持ち、知っていくことで次世代へとつながる。住民が地域に誇りを持ち観光客を受け入れることにより、地域の活性化にもつながる。地元の準備ができていない状態で観光客が殺到すると、地元は疲弊する。
- 自然や歴史遺構に限らず、太秦の映画のようなソフト産業も文化と思う。西京極の産業も「ものづくり文化」という視点からは、右京のもう1つの文化の側面と言える。
- 右京区には、京北から流れてきている京都で一番大きな川、大堰川・桂川がある。水を利用して、川で栄えた文化といえるのではないかと。嵐山が車で渋滞するから、川を遊覧船で嵐山に来るような、大阪みたいに水のまちのようにはできないかと。観光と交通渋滞緩和になる。
- 船の上から見る景色は全然違うから絶対良い。
- 川は上流の人と下流の人が結婚したとか、商売が成り立ったとか、人と人の縁を結んでいる。川の存在は大きい。
- 平安遷都も川の要素が大きかった。「川」は良いアイデアだ。
- 川を積極的に活用するか、自然保護を優先するかの議論もある。もの凄く大きなテーマだ。

右京独自の景観づくり

- 京都市の景観政策はどちらかというと、市中心部・町家に目を向けている。今の景観政策に満足せずに、もっと面白いことを掘り起こし、発信した方が良い。
- 林業をやっていたから山並みの景観が保たれ、農業をやっていたから嵯峨野の景観ができた。景観は、建物だけを指してはいない。

- 町なかの中京区などは、景観条例で格子や壁の色などを指定しているが、右京は景観条例で軒先60cm出すなどやっとり組み始めた。町なかより取り組みが遅い。
- 町家だけの地域ではない。農家もあれば町家もあるという地域だ。

安全に歩いてまわる観光

- 自転車で回るといのもあるが、自転車に乗りづらい人もいるから、歩く観光・安全に歩ける観光を目指すべきだ。上手に整備したら歩いて回れるはずだ。嵯峨を歩いて回ると全然印象が違う。
- 今後「歩いてもらう観光」のためには、右京に住んでいる我々は、歩く人を呼び込むのか、それとも滞留時間を長くする仕掛けをしていくのか、工夫のしどころが違ってくる。また、そうした方向性そのものが、住民にとって良いのか悪いのかということもある。目指すところを見極める必要がある。嵯峨を細やかに観光してほしいなら、歩いてもらう必要がある。それには、「パークアンドライド（自家用車を駐車し、公共交通を利用して目的地まで移動する方法）」が欠かせない。今後、土地をどの辺りに確保して、どうしていくのかを検討していく必要がある。
- ガソリン車の規制は必要だ。車をどこかでパーク（駐車）させ、モノレールのような乗り物に乗り換えさせるような発想が必要である。そうすればゆっくり歩けるし、車の排気ガスの問題も解決できる。
- 右京には、何日も滞在して観光できる場所がある。京北一日・高雄一日・嵯峨一日・嵐山一日と、三泊四日ぐらいしないと右京を知り尽くして貰えない。
- 公共交通を利用せずに車で来る人が多いと、観光シーズンに大渋滞が起こる。住民の日常生活に差し支えるから、渋滞を改善する必要がある。
- 高速道路の1,000円割引が始まって、マイカーで観光に来る人が激増した。
- 市バスや観光バスなどの中で画像を使って道案内の情報を紹介できないだろうか。今、京都一周トレイル（京都を散策する全長約70Kmのハイキングコース）で京北が繋がるように、京北コースも整備していて、完成しつつある。整備しないと、シーズン中は渋滞で子供連れの家族が困っている。
- 福王寺の交差点の渋滞は、五条通りまでか、新丸太町通りまでか、西大路方面までのトンネルでもつくらないと解消できないだろう。今考えると、山越線が整備されていたことだけでもありがたいし、ましだった。更に道路が拡幅されて、バイパスにでもなればもっと良い。

右京独自の景観づくり・安全に歩いてまわる観光

- 電柱が地中化されている地域はやはり良い。
- ヨーロッパの歴史的都市の多くは電柱が地中化されている。
- ヨーロッパは意識が日本と違っていて、あるとき電柱をなくそうとした。
- ヨーロッパの都市は歴史が古く何百年と続いている。一方日本、右京でも30年前は田んぼだったところが急に都市化された。まちが成熟していないと電柱を地中化できない。まちとして成熟していても、道が狭すぎると整備できない。電柱にあるトランスが置けるぐらいの道路幅が必要である。

観光客に対する情報提供

- 右京への入り口はわかりにくい。観光客が間違わないように整理する必要がある。交通アクセスがすぐわかるようなPRも必要だ。
- 例えば、阪急嵐山駅は場所が判りにくい。

農林業の振興

- 右京の景観をつくるベースになっている農業や林業といった産業についても考えていく必要がある。大きな方向として、産業についてはどういうまとめ方にしたら良いだろうか。
- 地域的にみるとやはり農業・林業は入れる必要があるだろう。
- 今はただ見て回る観光ではない。何かをつくるような体験的なものが求められている。そういう視点からも農林業の振興が必要なのではないか。

地産地消・循環型社会

- ペレット（廃材や間伐材を利用した燃料）は環境負荷が小さい。CO₂削減のためにも皆が林業に関心を持ち、山の荒廃を防ぐためにもペレットを公共施設などで積極的に利用するように働きかけていく必要がある。
- 基本的には山の資源の有効活用になるが、消費先開拓は課題だろう。
- ランニングコストは石油よりは安いですが、原材料や製品の運送費がかかるので、販売先は京都と滋賀に限定されるだろう。
- 天ぷら油を再利用したバイオ燃料で市バスを走らせるのに、相当お金がかかっている。バイオ燃料よりペレット燃料の方が良いかもしれない。ガソリンが値上がりすれば収支バランスがとれることもある。産業廃棄物処理費も取れるので、産業廃棄物でペレット製造する産業廃棄物処理業者もいるが、状況によっては木材から製造するほうが良い場合もある。
- 残念なことに、木材の値段は下がることはあっても上がることがない。エコカーに注目が集まっている時代だが、木材を燃料化するのはやはりコストがかかる。

観光と地域の活性化の両立・将来像を地域で考える・魅力ある右京の暮らし

- 利便性などの理由で住む場所を選んでいる人は、自分達の地域の特徴にはあまり関心がないだろう。自分達の地域のことを知ったら、地域がこうなったら良いと願ったり、地域の活動にコミットする意識が出てくると思うので、「次世代を育てる」のは大事だと思う。後は、「観光」で色々な人が来るのが、地元にとってどうなのかというのは非常に難しい問題だ。より観光を広げる方向にシフトするのか、そうではなくてゆったりと住めるまちにシフトするのか、大きく2つの方向性があると思う。その辺りを地域の人達が考えていくような取り組み方が必要である。
- 地域を活性化するには、人に来て貰わないといけないだろう。だから、静か過ぎるまちは具合が悪い。個人的には、どちらかというところ、知って貰い、来て貰い、このまま住みたいと思うようなまちのほうが良い。
- 若い人に住んで貰える地域、住みたいなと思える地域であってほしい。

- 働く場所と住む場所が一致するほうが良いという人が多いのであれば、色々な人を呼んできてもっと活性化して、という方向性になると思う。逆に、町なかに働く場所があつて、ゆったり落ち着いたところで暮らしたいという人が増えるのであれば、観光地になって人がドッと来るよりも、のんびりしていたほうが良いということになると思う。
- どういう活力が良いのかという選択になる。
- 30年前に積極的に町家に住みたいという若者はほとんどいなかったが、今は町家に住むのはカッコイイと思う若者が出てきた。その様変わりを考えれば、やはり発信していくことが重要だ。右京はちょっと郊外で、農もあるし山もある。京都の町なかとは違う京都ライフ、魅力的な暮らしが右京ではできるというように。
- 右京の魅力の引き出し方をもう少し整理したほうが良いのかもしれない。
- 便利で手近で何でも揃う生活ではないが、「2, 3歩歩く」ちょっとの不便さが右京らしさではないか。
- 代々の京都人ではなく、一般的な建て売り住宅に転入されて住んでいる人達にも、京都ライフに憧れて来る人もあるのではないか。町家があんなに人気があるのだから。

地域の暮らしを次世代に継承

- 若い人が住むということについてだが、今まで核家族化が進んでいた。それよりも色々な世代と一緒に住む方向に向かっていくのが大事だ。子育て支援にも、そういう視点が必要である。今までは若い世代は、おじいちゃん、おばあちゃんに子供をみて貰い、働いていたが、それができなくなった。それなら、例えば模擬おじいちゃん、模擬おばあちゃんが子供達を見守るといのはどうか。元気なお年寄り一杯いる。そのパワーを有効に生かしながらだと地域が活性化できるのではないか。
- 20年前を考えると、模擬おじいちゃん、模擬おばあちゃんがいた。
- 文化の伝承も、祖父母から孫へという関係で伝えられていた。今は若い人が少なくなって、お年寄りのほうが多くなっている。

その他

- 今は、自分達でできることをという住民目線で話しているが、住民がやれることのレベルを超えている問題もある。例えば野生の鹿・猪・猿・熊などによる獣害は、市役所などで抜本的に取り組んでほしい、など、言うべきことは言った方が良い。自分達はここを頑張るから行政はここに力を入れて貰えないか、といったことだ。陳情型は駄目かもしれないが、生活に密着した事柄で、行政との役割分担の話はでてくるだろう。それを提案的に言っていく必要はある。